特別寄稿　「都市の医師は守る！」－日台友好と心体の健全発達－

大阪経済大学名誉教授　稲場　紀久雄

台湾・台南市は、水道給水１００周年記念事業の一環として、本会評議員・稲場紀久雄氏の著作『都市の医師―濱野彌四郎の軌跡－』（水道産業新聞社、１９９３年２月刊）の台湾版を昨年発刊しました。濱野は「台湾の水道の父」と称される人物で、原著は濱野を主人公に、バルトン先生との師弟関係を描いた評伝です。

著者は、台湾版発刊に当たって、あとがき「“幸せな社会”を希求する台湾の人々に」を新たに書き下ろしました。そこで、稲場氏の了解を得て転載するものです。（編集委員）

第１節　台湾の人々の思い

昨年（２０２２年）３月初め、台南市（台湾）文化局の葉澤山局長から拙著『都市の医師－濱野彊四郎の軌跡－』(以下『都市の医師』) の台湾版発刊の許可を求めるメールが届いた。メールには、概略次のように書かれていた。「貴書『都市の医師』は、故司馬遼太郎氏の『台湾紀行』に紹介され、奇美株式会社の創立者・許文龍様、故李登輝総統も高く評価しています。今年は、旧台南水道給水１００周年、さらに山上花園水道博物館開設３周年を祝います。そこで、弊庁は、貴著の中国語版の発刊を計画しております。恩師バルトン先生と共に渡台した濱野彌四郎は、台湾現代化の衛生工程発展の基礎を固め、“台湾水道の父”と称されています。翻訳許可をいただければ、今年９月上旬には出版します。ご承認を賜りたく、よろしくお願い申し上げます」。

驚いた。「何故今、台湾版なのか」と。『都市の医師』は、30 年も前の作品なのだから。だが、３年前（２０１９年）の１０月、私は″台南山上花園水道博物館″の開設式典に『都市の医師』の著者として招待され、葉局長の面識を得ていた。当時から台湾版発刊の計画があったのだろう。そう思うと、葉局長や台南市当局の思いが心に響いた。

私は、水道産業新聞社の西原（一裕）社長（当時）と対応を相談した。出版不況は、当時も今も変わらない。厳しい経営環境の中、出版された同社の同意は、台湾版発刊の大前提であった。西原社長は、「日台友好の観点から台湾版『都市の医師』の発刊に全面的に協力する」と快諾された。

そこで、私は、次の条件を付して、発刊に同意した。

第一点；原著発刊から３０年経過しているので、若干の修正を了解されたいこと。

第二点；翻訳者を原著の姉妹編『バルトン先生、明治の日本を駆ける』（２０１６年、平凡社刊）（以下『ハルトン先生』）の台湾版翻訳者・鄧淑晶、淑瑩女史（ご姉妹）に依頼して欲しいこと。これら２条件が了解されたことは言うまでもない。

ここで、条件について説明したい。

原著発刊時点では、先生の来日までの足跡に不確かな面が沢山あった。発刊後、先生の来

日経路がインド洋経由でなく、アメリカ経由であることが判明した。私は、直ちにこの点を公表したが、台湾版では改めて関係箇所を修正した。

私にとって、先生の母国スコットランドでの足跡調査は、長年の懸案であった。幸い奉職する大阪経済大学は、サバティカルの許可を与えてくれた。そこで、私は、妻と共に２００５年４月から４ヵ月余りスコットランドの首都エディンバラに居を移し、先生の来日までの足跡調査を行った。そして調査結果を基に、評伝『バルトン先生』を２０１６年１０月発表した。この作品は、２０１６年度土木学会出版文化賞を獲得したが、さらに幸運にも「台北駐日経済文化代表処」の謝長廷代表（台湾駐日大使）の評価を得た。謝代表は、職員に「この本を翻訳する者はいないか」と呼び掛けた。秘書の鄧淑晶さんがこの呼びかけに応じ、妹さんの淑瑩さんの協力を得て、翻訳を進めた。かくして２０２１年６月、『バルトン先生』の台湾版『巴爾頓伝奇ー百年前的台日公衛先駆ー』が萬巻楼書店から発刊された。

『都市の医師』は、『バルトン先生』の姉妹編だから、翻訳は当然、鄧姉妹でなければならない。しかし、翻訳作業は、母国・台湾を深く愛していなければ出来ない。鄧姉妹は、台南市の依頼を受け入れられた。発刊まで６ヵ月弱しかなかったので、翻訳には大変な努力が必要だったろう。鄧姉妹が台南市の隣の都市・高雄市のご出身だったことも幸いした。

写真ー１　原著（左）と台湾版（右）

私が重視した問題は、「原著発刊から３０年も経っているのに、何故、台湾版の発刊なのか」という疑問であった。この疑問は、司馬さんの「国家とは何か」という問題提起と直結していた。目の前に展開されているプーチン大統領の理不尽なウクライナ侵攻、ウクライナの人々の悲劇とロシア及びロシア軍の人倫荒廃。私は、思索を重ね、台湾版のために「後書きに代えて」を書き下ろした。この文章は、“『都市の医師』発刊から３０年ー「幸せな社会」を希求する台湾の人々にー”という標題で、全文が台湾版に収録された。

私は、日台友好の絆をより一層太く強くする一助として水道産業新聞の読者に「後書きに代えて」を読んでいただきたいのである。原文は２万字弱だが、約４千字に圧縮して紹介する。

第２節「幸せな社会」を希求する台湾の人々に

（１）日台友好の絆

原著『都市の医師』の発刊から台湾版誕生まで約３０年、短い歳月ではない。その歳月は、冷戦終結後の「危機の３０年」と重なる。

台湾の人々は、この間、「自由で幸せな社会」の構築を求め続けて来た。台湾版の発刊は、

この願いの一環ではないだろうか。

司馬さんは、『台湾紀行』に「李登輝さんが総統に昇格した（１９８８年）前後から、台湾の言論は自由になった。でなければ台湾に来ることは決してなかった」と書いている。司馬さんは、李総統と懇談し、肝胆相照らす友となった。お二人は、奇しくも同じ年に生まれ、良く似た青春時代を過ごした。二人が初めて会談した時、共に７０歳。まさに旧友が再会したように瞬時に互いを理解したのだろう。

『台湾紀行』の書き出しは「国家とは何か」。まさに「肺腑を衝く」問題提起である。この問題は、李総統には司馬さんより深刻な様相を呈していたことだろう。日本統治時代、「岩里政男」という日本名を名乗っていたのだから。司馬さんは、中国の歴代王権を次のように評価する。

“中国の王権が「公」であったことは一度もなく、権力は「私」物だった。ところが蒋経国は、１９８５年１２月、「私」の放棄というべき宣言を出した”。

蒋経国総統は、戒厳令を１９８５年７月解除、台湾人の李登輝を副総統に据え、生粋の台湾人総統誕生の道を拓いた。李総統は、司馬さんとの対談で、“「公」の国家、社会をつくりあげたい。民主化を徹底的にやる”と決意を語った。

司馬さんは、『台湾紀行』の一節「潜水艦を食べる話」の中で『都市の医師』を紹介した。衛生工学は、潜水艦とは違った形で台湾人の生命を守る。そこに、「国家とは何か」という問題が関係して来る。人々の健康を守ることが「健全な社会の創出」の要諦であり、国家最大の目的だからである。

（２）演野弼四郎の胸像再建

司馬さんは、台湾の歴史教育について嘆く。「学校では台湾史は、ほとんど教えられることがない」。台湾では１９９７年に初めて歴史教科書『認識台湾』（「台湾を知る」）が作られた。この教科書の日本語版の訳者・蔡易達さんは、次のように述べている。「この国における“民主”とは、台湾の“民”がよその土地から来た政権の統治から脱却し、初めてこの島の“主人公”になったことを意味している」。

ここに一人の愛国者がいる。許文龍さんである。１９２８年台南市生まれで、台湾屈指の名経営者である。彼は、社員にこう語った。「歴史上の記述は、見る角度によって異なる。過去に学校で習った歴史は、権力者の立場から見た歴史だった。事実上、国家の版図が如何に大きく、民族が強大であっても、人民は幸福であるとは限らない」。

チベットや新疆ウイクル自治区、あるいは内モンゴル自治区の人々を思うと、まさに至言である。特に内モンゴル自治区については、司馬さんの『草原の記』（１９９２年刊）に貴重な証言が記録されている。

私の大学教員時代、内モンゴル自治区出身の学生がいた。自治区の人口構成は、現在ではモンゴル人が少数派で、漢民族が８０％を占める。漢民族が続々と押し掛け、巧みな経済誘

導政策で土地が収奪されて行った。

権力政治によって、在来の人々の自由が奪われた。正当な法的行為を装っていても、ロシアのウクライナに対する侵略行為を髣髴とさせる。国家の支配はあるが、そこには国民の意志に基づく自由も幸せな暮らしも無いようだ。

許さんが執筆した『台湾の歴史』では、「衛生環境」が強調されている。

写真－２　濱野彌四郎の復元胸像（許文龍作）
台南山上花園水道博物館の園内中央に据えられている

「当時（日本統治時代初期）台湾人は、哀れな境遇にいた。平均寿命は、３０歳余りで、マラリア、赤痢、チフス等の伝染病が常に流行していた。日本人は、衛生状況を改善するために上水道や下水道を造り、後藤新平は日本から百余人の医師を招聘して（略）公医制度を設立した」。

許さんは、『都市の医師』を読み、濱野彌四郎の胸像再建を決意した。私と妻は、２００５年３月下旬、お招きに応じ台南のご自宅を訪ねた。許さんは、私に「水道博物館を日台友好の懸け橋として実現したい」と提案した。山上浄水場をそのまま博物館にしてしまう大構想である。

山上浄水場は、２００２年台南県政府の県定古跡に指定され、２００５年台湾政府内政部により国定古跡に昇格した。また、２０１０年日本の土木学会から「土木学会選奨土木遺産」の認定を受けた。今思えば、着々と準備を進めていたとも思える。

（３）水道博物館の空間配置

博物館構想は、２０１９年１０月『台南山上花園水道薄物館』として実現した。世界でも類例のない規模だ。正門から真っ直ぐ伸びる道路は、「バルトン大道」と命名された。この道を進んで行くと、濱野彌四郎の胸像に至る。そして、その背後に往時の施設がそのまま博物館になって広がる。私は、『都市の医師』の著者として次のような祝意を述べた。

「博物館は、健全な“水の輪”を結び、“人の輪”を広げ、“生命の輪”を守るために必要です。この博物館が未来の世代に水の原点を考える施設として末永く大切にされますよう祈っています」。

水が循環して尽きないように、幸せも人々の健康も未来に継承されるべきもの。そのためには、濱野が日本人、先生がスコットランド人という民族性を超え、公に尽くす一人の人間と捉えなければならない。バルトン大道の一端は、濱野の胸像である。さすれば、他端は、台北の先生の胸像でなければならない。

（４）バルトン先生の胸像復元

戦後７４年もの間、先生の胸像の台座は主を失ったまま、寂しく屹立していた。私は、台北市長・柯文哲氏に胸像再建を懇願する手紙を送った。打てば響くように快諾の返書が届いた。新たに制作された胸像（蒲浩明作）の除幕式典は、２０２１年３月３０日に挙行され、次の３点で民主台湾に相応しい国際的な行事になった。

①台北と東京に会場を設け、リモート方式により同時開催した。

②イギリス、日本、そして台湾３カ国による国際的な式典となった。

③小池東京都知事が祝辞を寄せ、台湾と日本の首都の絆が強化された。

新像完成から除幕式典までの１年間の紆余曲折は、複雑だった。新型コロナが波状的に襲って来た。その上、台湾は、２０２０年７月３０日、民主化の父・李登輝元総統の逝去という出来事に見舞われた。柯市長は、謝長廷駐日代表と相談を重ね、最終的に除幕式典を２０２１年３月３０日に開催する決断を下した。

先生の来日前（明治１９年）、日本ではコレラが大流行していた。普通なら来日しないところだが、先生は来日した。そこに、ベンサム主義に根差した先生の信念が認められる。チャドウィツクは、「イギリスの公衆衛生の父」と讃えられるが、私には先生の人生は、チャドウィツクのそれに重なるように思える。

先生と濱野は、地を這うような努力を続けた。首都・台北の水道水源を求め、淡水河の源流域探索中、先生は風土病に侵され、東京に戻った後、１８９９年８月５日不帰の客となった。

愛弟子・濱野は、「台湾の衛生工事の基礎は、先生によって確立された」と台北水道水源地に胸像を建立した。この胸像が７６年振りに再建された。

さて、台湾の人々は、「生命の水」をどのようにして守れば良いのか。

私は、先生の基本思想を次のように考える。

「上下水道施設を市民の幸福増進と心身の健康の獲得に寄与するコモンズと捉え、市民がその管理の健全性を自助力によって達成する社会を実現する」。さらに先生の「悠久の夢」は、「デモクラシーが息づく社会を創出し、時空を超えて未来に継承することに生涯を捧げたい」ということではないか。

写真－３　バルトン先生の新胸像（蒲浩明作）除幕式（２０２１年３月３０日）

（５）問い続けよう、「国家とは何か」を！

司馬さんが『台湾紀行』で「国家とは何か」という問いを発してから３０年余り経った２０２２年２月２４日、ロシアが隣国ウクライナに侵攻した。「危機の３０年」の終焉である。司馬さんは、「公」と「私」という視点から国家の在り方を論じ、“毛沢東、蒋介石でも権力は「私」物だった”（『台湾紀行』）と断じた。

プーチン大統領の行為は「権力の私物化」そのものであり、その人倫は、地に堕ちている。台湾の歴史教科書は、こう伝える。

「中華民国の鎮圧軍は、１９４７年３月台湾に上陸すると、各地で武力を用いた掃討と鎮圧を行い、おびただしい死傷者が出た。無辜の民衆の生命と財産が甚大な損害を受けた」（『認識台湾』、台湾国民中学歴史教科書）。

この事実が教科書に採り上げられたのは、四半世紀前である。ウクライナ侵攻のような蛮行を台湾で許してはならない。ウクライナ侵攻は、国際秩序や国家の在り方を問い直す契機となるだろう。これらの問の根底に「人々が幸せに生きる社会とは何か」という根源的な問題がある。先生と愛弟子・濱野彌四郎の生き方と行動の中にこの問いを解くヒントが隠されている。

本節の筆を置くにあたって、「台湾の人々に永遠の自由と平和を！悠久の幸せを！そして、永遠の日台友好を！」祈る。

第３節　心体の健全発達

この原稿を書いている今日は、奇しくも８２回目の太平洋戦争の開戦日（２０２２年１２月８日）。今朝の「天声人語」に次の文章が書かれている。

「人類畢生の行為は、心体の健全発達に満足せる生活環境、即ち生理的円満を享受せんとする目的に外ならず」（「国家衛生原理」１６頁）。

文頭に「人類」を掲げ、偏狭なナショナリズムを排している。私は、繰り返し「国家衛生原理」を読み、そこに「幸福循環社会」創出の構想を読み取った。実は、バルトン先生も同

写真－４　刎頸の友：後藤新平とバルトン先生

じ考えだった。後藤と先生は、先生来日直後の１８８７年（明治２０年）７月、函館と青森、仙台など東北の主要都市を視察した。後藤は当時、「国家衛生原理」の構想を練っていた。「人は人を知る」。二人は、意気投合し、刎頸の友となった。

濱野彌四郎の場合、養父・濱野昇との関係も重要だ。濱野家は佐倉藩の藩医の家柄で、当主濱野昇は第一回衆議院選挙に立ち、代議士となった。日清戦争時は陸軍軍医として渡台し、

悪疫島・台湾の環境改善の必要性を体感した。彌四郎の渡台は、養父の切なる希望に沿う一面があった。

後藤は、先生と濱野の後を追って台湾総督府民生局長として赴任した。三人は運命の糸で結ばれていたのであろう。かくして悪疫島を「美麗島」に変身させる戦いが本格化した。

後藤の政治手法は、「旧慣調査」に基づくものだった。医師は、病人を一人ひとり診断し、症状に合わせて処方を決める。国家統治も、国民の実情に合致していなければならない。「既定の制度」を権力で強要するのではなく、「旧慣調査」の基づいて国民に受け売れ易い形で実施することが重要である。

この考え方は、企業経営にも通じる。この点こそ、名経営者・許文龍氏が後藤を今なお「わが師・後藤」と讃える理由である。

後藤は、総督府民政長官を経て満鉄総裁、逓信・内務・外務の各大臣、東京市長、さらに帝都復興院総裁と政治の道を登って行った。そして最晩年、前方に横たわる障害に挑戦した。普通選挙（普選）法の成立（１９２５年３月）と軌を一にして開始した「政治の倫理化運動」である。後藤の信念は、「政治は力なるにあらず、（国民に対する）奉仕なり」であった。「政治家の荒廃した倫理観を糾す」必要に迫られたのだ。それほど政治家の倫理観は歪んでいた。脳溢血で倒れた直後だったが、“やむにやまれぬ大和魂”が後藤を駆り立てた。だが、無理に無理を重ねた結果、１９２９年４月、岡山に向かう車中で三度目の脳溢血に襲われ逝去した。

私は、後藤があと１０年長生きであれば、「太平洋戦争は、どうなっていただろうか」と思う。後藤の思想は、１９４８年制定のＷＨＯの健康の定義に重なる。さらに「幸福循環社会の創設」の理念は、２０１５年国連総会で採択されたＳＤＧｓに通じる。後藤の思想は、時と共に輝きを増し、今も生き続けている。

明治維新は後藤の「政治の倫理化」運動を経て、７７年後の敗戦で崩壊した。現在は、敗戦から７８年。再び崩壊現象の兆しが濃厚だ。プーチンのウクライナ侵攻と無差別攻撃は、言語に絶する。この非道な攻撃は、今始まったのではない。「セミパラチンスクー草原の民・核汚染の５０年ー」（森住卓著、１９９９年、高文研）が伝えるロシアの核実験場（カザフスタン共和国内）近傍の人々の惨害は、とても言葉で表現できない。そこに如何なる人倫があるか。強者が弱者を虐げる論理が堂々とまかり通っていたのだろう。

これは他人事ではない。日本でも政治倫理の荒廃は、顕著になっている。今や、日本も世界も暗雲に覆われている。

元駐日台湾代表・許世楷氏は言う。

「世界の（略）流れは、“民主、自由、人権”という方向に向かっています」（『台湾は、台湾人の国』、２４０頁、はまの出版、２００５年）

楽観論かもしれないが、私は「そうあるべきだ」と思う。この意味で許氏の見方に同感である。しかし、この方向に進めるためは、国民一人ひとりが「国家とは何か」を考え、主体的に行動する必要があると思う。（了）